

第二章 中野学校

「那須野与一さんですな。」

本郷校舎の赤門を出たところで、与一君は恰幅の良い背広姿の二人連れに声をかけられた。

憲兵にしては服装も雰囲気も違うが、自分はアカではないと言い張っても理由など何とでもつけてなぶりものにされることだろう。ここは無駄に逆らわず様子を見たほうが得策か？と与一君は考えた。

「自分は那須野でありますが、どう言ったご用件で？」

”背広姿で年輩、履いている靴は革靴。草履を捨てて走りだせば追いつかないだろう。三四郎池を越えて上野方面に逃げれば、否、僕の名前を知っていると言うことは寮まで手が伸びているのか？”

疑心暗鬼で二人を見る与一君に二人は身分証明書を見せた。

「私たちは陸軍省の者で。いや、警戒せんでくれたまえ、君も徴兵のことくらいは覚悟しているだろう。」

「それはわかっていますが、僕はまだ学生の身分です。」

まだ、学徒出陣が始まっていない時世であったので、まさか陸軍の青田刈りと言うこともあるまいし、なんでこんな軍人に不向きなぐうたら学生に白羽の矢が立ったのか？やはりアカ狩りなのか？と納得いかない与一君であった。

「いや、実にいい！どこをどう切り取っても軍人に向かないタイプだ。頭も悪そうで利発そうにも見えない！最高にいい素材だ！」

褒められているのか？けなされているのかわからない。

「君、見たまえ、あの背筋の伸びた利口そうな学生。向うにはさも有能と本を抱えた眼鏡の秀才。こういう人間はダメ！その点、君は素晴らしい。どこからどう見ても落ちこぼれた体たらくな風貌。民間の企業ならまずどこも採用しないだめ男！こういう人材を求めていたんだ！」

絶対けなししている。馬鹿にしているんだ！と与一君は思った。が、うつかり理屈をこねてアカと間違えられても身の危険があるので黙っていた。

背広の男が合図をすると黒いクラシックなメルセデスが路上で止まった。

「まあ、乗りたまえ。心配することはない。我々の話を聞いてもらうだけだ。」

促されると言うより、ほぼ両脇を抱えられてメルセデスの後部座席に引つ張り込まれた与一君であった。

陸軍のメルセデスを追いかけて来る青年がいた。共産主義者の刺客か？車内に緊張感が走った。

やがて青年はメルセデスに並び追い抜いて走り去っていった。

皇居勤労奉仕団として秋田からやってきたネロさんであった。

「那須野君は米国で生活していたそうだね。英語は堪能かね？」

「父の仕事の関係で幼少の時に米国におりましたが、米英との関わりはみじんも・・・」

「そんなことはどうでもいい、英語は堪能かね？」

「日常生活に支障はない程度に、論文も読めます。」

軍の通事としての適性検査か？それなら東京外国語学校があるではないか？まさか、米
国とのスパイ容疑をかけられたのか？

与一君たちが乗ったメルセデスは明石町の細い路地に停まり料理屋の二階に連れていかれ
た。

与一君と同じような風体のさえない若者が六人ほどいた。

料理が並び始めると、与一君を連れてきた背広姿の年輩の男性が趣旨を説明し始めた。
それはつまり、スパイの育成機関の話であった。

軍にも特務機関はあるが、いかにも軍人と言う所作や見識で人に紛れてもはすぐにばれ
てしまう。誰が見ても軍人には見えない、軍の手垢がついていない若者を育成する機関であ
ることや、今まで日本の美德とされていた真逆を用いても生き抜く人材を育てることなど
を説明された。

ここまで聞いてしまってもう後戻りはできないのでは？と与一君は覚悟した。

杯が回され、都合七人の若者がそれぞれ自己紹介させられた。東京帝国大学、一橋、東
京外国語学校、早稲田、慶応。それぞれ名のある大学の学生だった。

しかし、この所属校の名前がなければただのダサイ兄ちゃんたちだった。正座をしているの
は古典芸能をたしなんだと与一君くらいのもので、あとは座り姿さえさまになっていなかった。

与一君の隣に座っていた学生が徳利を差し出して話しかけた。

「僕は農学部で葉物野菜の研究をしている田子作造と言います。君も帝大なんだって？」
農学部は田無の農園で研究生活に入っている場合が多いので顔を合わせる機会が少なかっ
たが、頭に汚い手拭い巻いて、もんへ姿に泥だらけの顔。今しがたまで千葉の畑で野菜を作っ
ていた農家にしか見えない。

ひでえもん集めて来たなあ。とあきれ与一君であったが、その中でも異彩を放っているこ
とには気が付かなかった。

「文学部で古典芸能の研究をしている那須野与一と申します。田子さんはいつこの話を
聞かされたんですか？」

「いつどころか、二時間前まで田無の畑で野菜の間引き作業していたんだ。君もかね？」

「はい。僕も本郷の校舎を出てすぐに。」

「どうやらもう逃げようがないみたいだな。それにしてもひどい学生ばかり集めて来たも
んだ。あの早稲田の学生なんか下町の大工にしか見えない。あの欠食児童のような慶応の学
生なんかあきらかにカルシウム不足だ。一橋の彼なんか露天商だぜ。こんなもんしかいないの
かね？」

お前らが抜きんでてヒデエんだよ。と言うことに二人は気が付いていなかった。

八紘一宇・大東亜共栄圏クラフエ、自分が独立した大隊、敵の捕虜になっても生き残れの
異なる価値観を持った機関であったが、このような工作機関をもっと早くに持つていけば大
東亜戦争突入は避けられたとも言われている。

このところ学業もうまく進まず教授との意見の食い違いで冷遇されていた。順当に駒を進
める仲間達をうらやましく思っていたが、どうせやりたいことも見当たらないのだから、こ
こで乗っかってみるのも一つの手かもしれないと与一君は思った。自堕落な暮らしをしている

ことにも嫌気がさしていた時期だった。

食事の後、彼らはそのまま中野にある教育機関に連れていかれた。後日、関西からも同じように集められた学生たちが入って来て教育が始まることになる。

お能ちゃんが与一君を中野の駅前で見かけた時、与一君は田子作造とともに寮に荷物を取りに行くところだったのだ。

軍服を着ない背広の軍人。秘匿機関の陸軍中野学校で彼らはそれぞれ身を伏せて生活する手段として、職人並みの裁縫や調理の技術を身に付け、芸者遊びや今で言うならホステスのカフェの女給の扱い方なども勉強した。

酢酸を使った写真の現像法や爆弾の作り方まで学んだ。農学部だった田子作造は毒薬について抜きん出た知識を持っていた。殺虫剤など有機リン酸を用いた毒薬は多い。のちにドイツのバイエル社が開発するサリンなどもこの有機リン酸を用いた毒であった。

田子作造は今で言うならば毒オタであった。

外国語も複数身につけなければならなかった。英語が堪能な与一君も中国語とロシア語を学んだ。それぞれが学んだ言語はそれぞれが赴任する地域でもあった。風体は様にならなくても高い学歴を持つ若者を選んだのもこうした能力に対応させるためだった。

これらの状況から与一君は自分が満州を中心とした大陸に回されることを察した。商社の社員として赴くのだろうか？もっと身軽に動けるテーラーの仕立て屋か料理人か？いづれにしても技術を付けなければならぬと思った。

「まいりましたよ那須野さん。」

その声をかけてきたのは神戸大学から来た酒井と言う同期生であった。

「僕は東京の商社に勤めていることになとおんやけど、兵役も徴兵検査もけえんよつてからに、脱走兵になったんやないか言われて、家族が非難されとおよおや。せやけど、どこにおおるとも言えなんだ、けつたいなこつちやでえ。」

訓練の一環で神戸のテーラーに反物をおさめに行ってきた、自分の噂を耳にしてきたようだ。

「誰もみな似たようなもんです。僕もどんなことを言われているか？気にしても仕方がありませんよ。」

与一君の場合は満州逃亡説と自殺説だった。

実のところ与一君も思い切りニアミスを犯していた。お能ちゃんの父親、つまり龍笛ハズバンドが中野学校の武術指南として赴任しており、教育の一環で武術指導を受けていた。ただ、こうした内容は家族であつても話せないのです、お能ちゃんは知ることがなかった。

そればかりか、料理の技術実戦のため、駅前の総菜屋でオカラや揚げ物などを作って売っているときに、生け花の仕事から帰ってきたお能ちゃんの母親、つまり龍笛さんにはったり会ってしまった。

「あら、与一君じゃない。こんなところで働いているの？でも、元気そうでよかった。」

「ややややや、あのですねえ。このことはお能ちゃんにも、栃木の母にもどうかご内密にお願いします。きんぴらゴボウサービスします。オカラも、ほら大盛で。」

「武尊はコロッケが大好きなの。」

「コロッケもメンチもお付けします。玉菜(キャベツ)だつてこんなにつけちゃいます。だから

どうかご内幕に。よしなに、ひとつよしなに。御代官様おねげでございます。お慈悲を。どうかお慈悲を。」

落第してこんな生活していることを知られたくないんだな、と察した龍笛さんは武士の情けで、こうして会ったことは娘はもとより、ママ友の与一君の母親にも一言も語らなかつた。それよりあの針のように硬い髪の毛を七三に分けた理容師の技術に感心した。

「与一さんもう死んじゃってこの世にいないんじゃないかってみんなが言うのよねえ。それより、このメンチめっちゃうまくねえ？こんな肉入れて採算取れるのかな？」
台所で与一君が作ったメンチつまみ食いしながら、与一死亡説を気にするお能ちゃんであつた。

「心配ないわよ。あの人はそんなに弱くない。今自分のやるべきことを一生懸命探しているのよ。それより、武尊の分までメンチとコロッケ食べちゃだめよ。また喧嘩になるでしょ。」
と言いつつ夫用にとんかつを隠しておく龍笛さんであつた。

中野学校終盤に差し掛かつた頃、与一君は陸軍省に赴いた。印度方面から帰還してきた藤原中佐に呼び出されたのだ。

「これをすべて頭に叩き込んでおきたまえ」と乱数が書かれた冊子を渡され、南支那から満州まで情報を操作するため行かされることを知つた。

その会議室にお茶を持って入ってきた女性を見て与一君は一瞬顔をそむけた。

「ぬ〜(なに)??与一さん!」

お茶を持ってきたのは沖繩から出てきたとろん娘だつた。

「おお、とろん君は那須野君と知り合いかね。」

「わんが雄弁大会んかい出た時、応援んかい来てくれた人やあ。」

「おお、そうかそうか、つもる話もあるじゃろ。もう会えないかもしれないからゆつくし話しなさい。」

と藤原中佐は気を使って中座した。

沖繩で高等女学校を出たとろん娘は政治家を目指して勉強をしていた。

二〇一五年にサウジアラビアが女性参政権を認めて話題になつたが、戦前は世界の主だった国でも女性に参政権がなかつた。日本は終戦後の昭和二十年に認められたが、フランスやイタリアもこの年に認められている。

女性が政治に口出しするなど考えもよらない時代ではあつたが、そんな時代に一歩先を見据えてとろん娘は活動していた。

”輝け! 日本国防雄弁大会あんたが大将!”に怒涛の勢いで予選を勝ち抜き、帝都での決選大会の時にとろんママさんのママ友仲間の龍笛ママさんを頼つて上京したのであつた。

お能ちゃんと東大能・狂言倶楽部の仲間も応援団として参加し、那須野与一君はトレードマークの弓矢を持つて会場に入ろうとしたために暴漢と間違われて取り押さえられる事件が起きた。

婦人参政権についても言及したが、肝心なところは東京の人には聴き取れない古い沖繩方言で熱く語つたので、”流れ”に敏感な東京人はなんだかわかんねえけど大感動して見事優勝してしまつた。

沖縄に帰ったふりをして帝都に残ったとろろん娘は辻演説で活躍していたが、官憲にアカとみなされて追われる立場になってしまった。

その演説を聞いて痛く感動した藤原中佐は、陸軍臨時職員に採用して事務員として勤務させた。

「てっきり沖縄に帰ったもんだと思ってました。でも、ご活躍されているようであれしいです。」

「与一さんもこれからまぎさる(大きな)仕事が始まるんやいねえ。チバリヨ。」

「ここで会ったことは皆には内密にお願いします。国家機密に関わる仕事なんで。」

「わんもおなじや！わんも憲兵のおたずねもんやい。奇遇ヤア。んで、うんじゅやぬうをやらかしたぬ(あなたはなにをやらかしたの)？」

「何やらかしたって、何もやらかしていないけど成り行きで、何やらかしたんでしようね僕は？」

「あぬ太ったいぐなーやいっちゃ(あの太った女の子はどうしたの)？」

「加奈子さんのことですか？何やったって言われてもお、僕は。」

かつて、とろろん娘の前で恋愛論の熱弁をふるった与一君であるが、アンドレイ・ジイドの「狭き門」におけるジエロームとアリサの恋愛とスタンダールの「恋愛論」の「結晶作用」についてなら一晩でも語りつくせるが、自分のこととなると全く喋れなくなってしまうのであった。

ほどなく自分で仕立てたスーツに身を包んだ与一君は神戸に行き、上海へ向かう船へと乗り込んだ。

瀬戸内の小さな島々をいくつも目にした。その島の一つにお能ちゃんが教師として赴任しているとは夢にも思わなかった。